カトリック 仙台教区報

2014年5月4日　No.217
発　行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

主の復活を喜び、たたえよう。アレルヤ!!

キリストと共に人々に身を渡す

〈聖香油ミサ説教〉

司教　マルチノ　平賀　徹夫

4月16日(聖水曜日)、カテドラルに教区の司祭ら38名が司教と共に聖香油ミサをささげた。ミサの中で、「病者のための油」、「洗礼志願者の油」の祝福と「聖香油」の聖別がおこなわれた。さらに神学生クリストファー佐藤彰洋さんが、「祭壇奉仕者」に選任された。司祭たちは、参加した約400人の信徒の前で、「司祭の約束の更新」をした。

東日本大震災という大災害から3年以上が経ちました。私たち仙台教区は、世界から、そして日本の全教会からの支援を頂きながら、被災地復興を願い、被災された方々と共にありたいと、祈りとともにできる限りの支援活動を続けてきました。教区のこの動きに合流してくださった方々、合流してくださっている方々、今日お集まりくださった皆様もボランティアとしてあるいは祈りや募金などで支援活動に加わってくださったことでしょうが、深く感謝を申し上げます。これからも、被災された方々を思い、神の助けを祈り求めながら、私たちの働きが神の憐れみの心・慈しみのしるしの現れとなるよう、心を一つにして進めていきましょう。この震災復興支援活動を続ける中、今年度2014年度から、仙台教区は地区制度を採って進むことにしました。教区を八つに地区割りし、各地区には複数の司祭を派遣して、地区内の司祭・信徒・修道者間の交流を盛んにするとともに小教区間の協力・連携を強めていきたいのです。そうすることで、「仙台教区という教会・キリストを信じる民が、いっそうの自覚をもって力強く福音に生き、福音を告げ知らせる」ものとなっていく新たな出発の時としたいと思います。



信徒・修道者の皆様、このミサによくご参加くださいました。司教が、教区内全地域の司祭方と共同司式でささげるこのミサは、司教と司教を囲む司祭団の一致を表すものです。主キリストによって招かれて、果たすようにと与えられた使命を喜んで受け留め、主のもとに一つとなって働きます、という心を表明し、そのようなものとして働くための力・恵みを受ける源となる一致のミサです。本日のミサは「聖香油のミサ」と呼ばれ、洗礼志願者のための油・病者のための油の祝福、そして聖香油の聖別が行なわれます。司祭とは、このミサで祝福・聖別された油をもって、絶えず人々をご自分の民としてお集めになる神の御業に協力し、果たす働きをする者であるとも言えるでしょう。

生命の泉

異常気象で雪に閉ざされた長い冬もやっと終わった。ご復活は、人間はもちろんだがすべての被造物が目に見える形でいのちが輝く季節に合致する。この喜びは信仰者にとってはイエス様の十字架という高価な代償によってもたらされたものだと信じている▼ご復活を信じているからと言ってそれだけで私たちに神の国が保証されている訳ではない。なぜなら「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入る」(マタイ7・21)のだから▼満たされながら物足りなさを感じている時代の中で、私たちは一人ぼっちの生活で気楽に暮らすことに慣れてしまった。ところが、気がついて見たら物に囲まれて一人ぼっちになっていた▼このような豊かな時代に人間はどういう存在なのかを思い出させてくれたのは「人が独りでいるのは良くない」という警告だった▼信仰者は、神さまにお会いするときまで「善きサマリア人」のように必要とする人に近づき隣人となる使命を果たして生きる。このように人に近づいて行く道すがら「復活のイエス様に」出会う準備をするのではないだろうか(マタイ28・9)▼独りで豊かに生きようとして、私たちの社会は重い荷物を抱え込んでしまった。誰のためにも役立たない人として生きようとしたのだ▼聖パウロの言葉に「私たちの中には、誰一人自分のために生きる人はなく」(ロマ14・7)というのは、「孤立無援の社会」への警告だった▼生まれたての赤ちゃんでも、病気になって人の世話を受けるだけで生きているように見えても、また老人であってもみんな人を慰めたり励ましたり喜びを与えるために生きる。復活の命は私たちのうちに息づいているのだから。(守)

さて、司祭団の皆様、聖香油のミサをささげるこの日は、主・キリストがその司祭職を使徒たちに与え、私たちにも与えてくださったことを記念する日であります。私たちは、年に一度でありますが、この典礼の中で、公に、「司祭の約束の更新」を行ないます。私たち一人ひとり、何年か何十年か前に、決断して司祭叙階を受けるときに、信徒・修道者の皆さんの前で、自分を捧げつくすことを神に対してはっきりと約束いたしました。この聖香油ミサの叙唱は「司祭はキリストの名によって人々のために過越の食事を整えて救いのいけにえをささげ、言葉と秘跡によって神の民を力づけるように召されています。また、司祭は、神のため、人々のために自らを渡して、キリストに従い、たゆみなく信仰と愛の証しを立てるように選ばれています」と謳っています。毎日のミサの中で私たちは、パンとブドウ酒の聖別の言葉を発するとき、イエスの言葉を自分の言葉として表明します。「皆、これを取って食べなさい。これはあなたがたのために渡される、わたしのからだ」、「これはわたしの血の杯、あなたがたと多くの人のために流されて、罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血」と。司祭は、キリストとともに自分の体を人々のために渡すのです。キリストとともに人々の罪のゆるしのために、自分の血を流すのです。確かにこれが私たち司祭の生き方であり、キリストに倣う「仕えられるためではなく、仕えるため」の生き方です。こうして私たち司祭が率先し、ともに居てくださるキリストのしるしとなりたいと思います。「私に従いなさい」と私たちを呼んでくださり、日ごとに私たちを支え導いてくださる主への信頼を新たにして、今年もご一緒に約束を更新いたしましょう。

司祭の約束更新に先立ち、これから、祭壇奉仕者の選任式を行います。仙台教区の重要課題の一つに「司祭召命活動」があります。司祭叙階に至るまでには、教会の中で、「助祭・司祭候補者」への認定、「朗読奉仕者」への選任、「祭壇奉仕者」への選任が行われ、その後、「助祭叙階」、「司祭叙階」へと進みます。司祭数の減少が大きな問題となっている中、幸い仙台教区には、ただ一人ですが、神学生がいます。神の御導きのもと、多くの皆様の祈りの支えの中で研鑽を続けて来て、今年度、神学科第三年に進む福島県・郡山教会出身のクリストファー佐藤彰洋さん＝写真＝が、今日、「祭壇奉仕者」に選任されます。

主への信頼をいっそう深めながら、彼が召命の道を力強く進むように、心を合わせて祈りましょう。またあとに続く青年たちが多く輩出する恵みが仙台教区に与えられるように心を合わせて祈りましょう。



地区制始動

司教　平賀徹夫

仙台教区は「地区制度」をとって進む緒につきました。２年前から司祭評議会および司祭集会で話し合い、宣教司牧評議会でも取り上げてきたのでしたが、東日本大震災という大変な事態に遭遇して大揺れに揺れた仙台教区という教会のあり方が問われての事だとも言えます。仙台教区は全世界からの支援と特に全日本・三教会管区あげての助けを頂いて、被災地の復興支援活動に取り組んできました。司祭数の少なさをカバーする司祭派遣や、全国の修道会特にシスターズ・リレーの強力な支援等から勇気を得ました。また「４→６・４５計画」に如実に表れていますが、小教区の枠を超え、多くの小教区が心（祈り）と力を合わせて支援活動に携わり、信者でない大勢のボランティアの助力もありました。支援活動は今後も続きますが、仙台教区はあの大震災で小教区の枠はおろか、カトリック教会という枠さえも気にせずに、苦しんでいる被災地・被災者のためにできるだけのことをするという教会のありようを世に示してこれたのではないでしょうか。

私は、地区制を通して、司祭・信徒・修道者間の交流・協力・連携がいっそう図られる中で、そのような教会の姿を地域社会に示せたら良いと願っています。

ところで、第二バチカン公会議から５０年という機会にあたり、日本の司教団は公会議公文書の公式改定訳を出版しました。ただそれは大冊ですので、その中の４憲章（教会憲章、現代世界憲章、典礼憲章・啓示憲章）を、今年２月２８日、手に取りやすい３冊の分冊で発行し、公会議の教えを勉強し直してみることを勧めています。さらに、いま日本語訳が進められていてその早い発行が待たれるところですが、２０１３年１１月２４日（「信仰年」の閉幕の日）に発布された教皇フランシスコの使徒的勧告『福音の喜び』も、私たちの教会理解、信仰理解、信者として生きるための知恵を深める上での良い材料になると思います。「地区制度」を形の上だけでなく、私たちが教会の本来のあり方を世に示すものとできるよう、祈りながら共に歩んでいきたいと思います。

司教日程　５月・６月

5・10（土）新潟司教館竣工式
13（火）ＮＰＯ法人釜石
16（金）部落差別人権委・事務局会議
19（月）福島会議（野田町）
20（火）司祭評議会　教区司祭団役員会
21（水）仙台教区サポート会議
22（木）学法東北カト学園理事会
23（金）聖ドミニコ学院中・高
狭山事件市民集会
25（日）いわき（砂子田祭）
26（月）教区司祭団月例会
31（土）ＮＰＯ法人釜石
6・2（月）部落差別人権委・定例会
5（木）子どもと女性の人権デスク
7（土）仙台教区修女連総会
10（火）司祭評・役、教区司祭団・役
16～20 司教総会定例会
21（土）21世紀キリスト教
社会福祉実践会議
22（日）野田町教会50周年
24～26 被災地サポート
第４回全国会議
27（金）保育施設協全国会議
（元寺小路）
28（土）社会司教委・シンポジウム
30（月）教区司祭団月例会
教区責任役員会

２０１４年度　仙台教区宣教司牧評議会
地区制に伴う規約改正・教区研修会等を討議

仙台教区宣教司牧評議会定例会が、3月21日（春分の日）、仙台教区センターで開催された。

議事に先立って、平賀司教から「4月から仙台教区は『地区制』という新しい姿で出発します。初めてのことで、いろいろな戸惑いもあると思いますが、でも、大丈夫です。今まで以上に絆を強めていきましょう。各地区ごとに司祭、信徒、修道者が良く話し合って進めていってほしいと思います。

一年間は、助走期間として、様々な問題を解決しながら進めていきましょう。

仙台教区が教会として何をしていったらいいかを知恵を出し合い、意見を出し合っていきましょう」と地区制への取り組みについて話された。



川崎忠紀師を議長に議事が進められた。

1．地区制に伴う宣教司牧評議会の規約改正について

宣教司牧評議会は、これまで、各県の連絡協議会から推薦された信徒の代表（各県2名、計8名）を評議員とし、さらに県代表評議員1名が、役員として役員会に出席してきた。

地区制に伴い、評議員は、各地区から選出された信徒1名、計8名とし、役員は、2つの地区（1～2地区、3～4地区、5～6地区、7～8地区）から1名、計4名とする改正案が提案された。

これについて

・2つの地区から1名の役員となっても、自分の所属していない地区をも代表することは不可能である。

・宣教司牧評は、司教の諮問機関なので、役員会で必ずしも2つの地区の代表として意見を集約して発言しなければならないわけではない。個人的な考えで発言して良い。

・地区制のことを考えると、地区ごとに役員を置いた方が良い。年4回程度の役員会にしても良いと思う。

・各地区の代表8名で役員会を構成すれば、定例会と同じことになる。これまで10回開かれていた役員会の回数を減らしても良いのではないか。などの意見が出された。

結論として、各地区の連絡協議会の動きもまだ落ち着いていない現状でもあり、現役員は、各県の事情をよく把握していることから、移行期間ということで、1年間に限り現メンバーで役員会を続けることとなった。

2．教会委員長の集い開催について

前回の教会委員長の集いは2010年に開催され、それぞれの小教区の抱える問題について意見交換が出来、各小教区が同じ仙台教区の中の教会であるという連帯感を強めることができ有意義であった。

今後の地区制の実施に伴い宣教司牧、教会活動、東日本大震災以降の復興支援活動について教区長を囲んで話し合う場を2014年度中に設けたいとの提案について全会一致で決議された。なお、開催時期については、各地区の動きが落ち着いた頃という意味で、年度後半に実施することとなった。

3．教区研修会開催について

教区研修会は、宣教司牧評議会主催で、2012年度から「典礼とは?」とのテーマで開催している。

2014年度は、知的研修のテーマを「集会祭儀とは?」、実践的研修テーマを「典礼における朗読」とする。なお今年度は、知的研修と実践的研修を一つにまとめて行うこととする。

地区割りに伴い、司教から「どこの教会でもできるだけ主日のミサを行えるように」との指針があるが、教区の現状から、全ての教会において毎週確実にミサが行われることは難しい。集会祭儀の準備をしておくことも大切であるとの役員会からの提案があった。

これに対して、

・集会祭儀については、各地区で奉仕者の研修も必要ではないか。

・研修会は、各地区ごとに開催してほしい。

・講師は森田師にお願いしているが、8地区を回るのは難しい。

・日曜以外の祭日や土曜日をあてることも考えられる。

などの意見が出された。

4．連絡報告

①仙台教区サポートセンターから（小松師）

3月10日に、日本司教団主催の東日本大震災被災者追悼と復興祈願ミサが行われた。

3月15日、原町教会で行われた「いのちの光3・11フクシマ」には100名程が参加した。

復興支援の活動は、8ベースと福島デスク、さらに各小教区の活動も盛んになっている。

司教総会で、今後3年間支援活動を続けることが決定した。

各小教区の支援活動を応援するために教区から10万円の活動支援金は、昨年15件の申し込みがあった。今後、小教区以外でも、教会につながっている団体にも支援することにしたので、活用してほしい。

被災した方々の仮設住宅に住む期間が長くなっている。「お茶っこ」の継続が必要である。さらに、復興住宅に移った人々のコミュニティの支援も必要になってくる。

ボランティアの減少に伴い、ベーススタッフの活動に頼らざるを得なくなってきた。

6月に全国担当者会議が3日間、郡山教会で行われる。

②人権を考える委員会（園部氏）

主として「ハンセン病問題に取り組んできた。

今後の活動として、

(1) 仙台教区としてこれまでの関わりについて一定の総括をする時期に来た。

(2) 松ヶ丘教会、新生園教会に関する資料を収集し、整理して保存、有効活用できるようにする。

(3) ハンセン病問題のような人権侵害が二度と起きないように情報発信や啓もう活動を継続する。

(4) 「ハンセン病問題を考える市民の集い宮城」の一員として、東北新生園の将来構想実現に協力していく。

③広報委員会から（岩井氏）

地区制に伴い、各地区の現状や活動を紙面に反映させるよう工夫したい。その意味で、ぜひ各地区に広報担当者を置いてほしい。

ホームページについては、エテメ神父が担当し、現在リニューアルの準備を進めている。

④各県からの報告

青森県　ジャン・ガブリ神父の送別会を実施。

岩手県　「岩手カトリック教会の沿革」の編纂完成。

宮城県　県連絡協議会は、今年の県大会をもって解散する。

福島県　「県の集い」を「7地区・8地区のつどい」とする。6月22日、野田町教会50周年。

修女連　4月から役員が改選され、会長はSr.笠原 節子（CDN）。

東日本大震災復興祈願ミサ

被災地に寄り添い祈る

3年目を迎え決意新たに

3月10日(月)、日本カトリック司教協議会主催の「東日本大震災犠牲者追悼と復興祈願ミサ」が、仙台カテドラル元寺小路教会で行われた。ミサは、日本カトリック司教協議会副会長・高見三明大司教(長崎教区)が司式、駐日教皇庁大使ジョセフ・チェノットゥ大司教、全国から集まった司教と司祭団が共同司式した。ミサには、被災地支援の拠点となっている8ベースの担当者、小教区の支援活動を担っている信徒、修道者らおよそ400名が参列した。東日本大震災から3年目を迎えるにあたって、今なお困難な中に置かれている被災地に思いを寄せ、さらなる寄り添いと祈りを続けて行く決意を新たにした。

午後6時から始まったミサでは、ジョセフ・チェノットゥ教皇庁大使＝写真右下＝があいさつで、教皇フランシスコの「心からのあいさつと連帯、祈りと、特別な祝福を送る」とのメッセージを伝え、さらに教皇は「この聖体祭儀がご遺族や友人の皆様にとって、慰め、支えとなり、復興作業を進める方々にとっては勇気となるよう」、特別な祈りをささげていると伝えた。

説教で、平賀徹夫司教は、今までに国内外から寄せられた支援への感謝をのべ、復興への道のりが長引いていることから、司教団が「オールジャパン」の支援体制をさらに3年延長する決議を「カリタス米川ベース」は漁業復興にかかわる人々のため。「カリタス原町ベース」は、原発事故により、まだ自宅に帰れない人々のため、除染活動にかかわっている人々のため。「児童養護施設小百合園」は、震災で親を亡くした子どものため、など、それぞれ神からの慰めと平安を祈り求めた。





したことに、「心強く思っている」と感謝し、仙台教区は、被災者への「寄り添い」を必要とされる限り続けていくことを表明した。

共同祈願では、各支援ベースからの祈りがささげられた。「障がい者自立センターかまいし」は、「生かされていることに感謝し、日々の営みを大切にしながら、精進することができますように」。

奉納では、それぞれのベースや小教区から、ゆかりの品や、被災者が仮設で作成した品々がささげられた。

閉祭にあたり、平賀司教は、このミサに合わせて派遣された米国とドイツの国際カリタス視察団の3人を紹介。感謝の言葉と共に、花束と記念品を贈った＝写真下＝。

さらに、参加者に共同司式した司教を一人ひとり紹介すると、会場から歓迎の拍手が送られた。

最後に、高見大司教から、全国の教会で唱える「東日本大震災被災者のための祈りII」が発表され、全員でこれを唱えた。

東日本大震災被災者のための祈りII

父である神よ。
すべての人に限りないいつくしみを注いでくださるあなたに、
希望と信頼をこめて祈ります。
東日本大震災によって今なお苦しい生活を送り、
原発事故によって不安な日々を過ごす人々のこころを照らし、
希望を失うことがないように支えてください。
また、亡くなられた人々には、永遠の安らぎをお与えください。
すべての人々の苦しみを担われたキリストがいつもともにいてくださることを、わたしたちがあかしできますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

～奉納された品々～

宮古ベース：さおり織り。
大槌ベース：ベース建物の解体片、サンタクロースの衣装。
大船渡ベース：陸前高田の「奇跡の一本松」の木片、震災直後に止まった時計。
カリタス釜石：ベースのシンボル、「傾聴スペースふぃりあ」の幟。
石巻ベース：被災した方々が育てた花、野菜。
松木町教会：傾聴で使用する茶碗と茶せん。
いわき教会：漁が出来なくなった魚業者が自立のために作る餅。
八木山教会：全国から寄せられた和服で作られた雛人形。
一本杉教会：仮設の方々が作ったミニ七夕。
仙台サポートセンター：活動3年の歩みを記録した「報告書」、「復興支援カレンダー」。
中央協議会復興支援室：「東日本大震災、復興支援のための祈り」





仙台教区「新しい創造」…第３期の取り組み（１）

「いのちの光3・15 フクシマ」 フクシマの運命を変えた日



福島第一原発の最後の爆発が起きた3月15日を「福島の運命を変えた日」として、原町教会の信徒有志の実行委員会が主催していのちの在り方を考え、祈るひと時として「いのちの光3・15フクシマ」が同教会を会場に開催された。

参加者は定員80名を越え、全国からおよそ100名が参加した。第一部「現地の光」では、一般社団法人えこえね南相馬研究機構理事の奥村健郎さんが、地元での農業や除染の支援など、復興に向けた試みを紹介した。第二部「みことばの光」では、歴史学者の太田道子さんが、「人間の書」としての聖書の魅力を語った。第三部「神の民の光」は、平賀司教による派遣ミサが行われた。

「いのちの光3・15 フクシマ」を終えて

実行委員　勝治　美喜子

南相馬にも春が訪れ、つくしがかわいい顔をのぞかせてくれています。

3月15日(土)の集会の折には、全国から大勢の方のご参加をいただきありがとうございました。また、原町教会を中心として、多くの方々からお手伝いをいただき、この日の集いを成功に導いてくれたものと実行委員一同感謝しております。

東日本大震災とそれに続く福島第一原発のメルトダウン事故。原発に最も近いところにある教会が原町教会でした。その教会で3年目にしてやっと開くことができた集いであったといえます。震災後は、自分たちの生活を再建することが精いっぱいの私たちでした。

この3年間で全国の方々から受けた物心両面のご支援は、被災地に住む者としてただただ「感謝」の気持ちでいっぱいでした。

それと同時に、ここに住む者として何が出来るのかを考えました。津波の被害だけではなく原発事故による放射能に汚染されたこの地について、ここを訪れて下さった方々に率直にお伝えしたり、抱えている不安などを話したりすることではないかと思い至りました。考えたくないことかもしれませんが、しかし考えていくことは私たちにしかできないことでもあると思ったのです。



第1部では、現地からの声を報告していただきました。この農村地帯においては農業の復興が出来て初めて復興の第一歩、土の再生と新たな農業の試みに力を入れている奥村健郎氏=写真上=のお話は地元で農業に携わる方の必死の声でした。



第2部の太田道子さん=写真=のお話では、2千年の歴史を持つ聖書からこの危機的状況にある今を、わたしたちはどのようにまなぶのか、多くの方々が深く考えさせられました。

第3部は、平賀司教による派遣ミサ=写真=でした。



説教で平賀司教は、50基もの原発の稼働によって、豊かで便利な生活を追求した結果、爆発事故により最も大切にしなければならない人間のいのちが危機に追いやられてしまったことへの反省をうながしました。

なお、太田道子さんは、5月、6月にも、原町教会を訪問し、お話をされるとのこと。

原町教会では、原発事故の問題がまだまだ終息する状況にないことから、来年の3月15日もこの集いを開催したいと考えています。

【お知らせ】

21世紀キリスト教社会福祉実践会議第9回大会

日時：2014年6月21日(土)
10時～16時

会場：カトリック元寺小路教会

参加費：一般2，000円
学生1，000円
（当日受付にて徴収）

テーマ：「震災によってあらわになった人間の苦悩に向き合う」

プログラム
・基調講演　阿部志郎氏(日本キリスト教社会福祉学会名誉会長)
・パネルディスカッション
・分かち合い　ほか

21世紀キリスト教社会福祉実践会議は、全国のキリスト教系社会福祉法人、ソーシャルワークを実践している連盟、団体の集まりです。隔年で大会（シンポジウム）を開催してる。

カリタスジャパンも加盟しています。

若い人々とともに
…復興のたくましいパートナー…

仙台教区「新しい創造」…第３期の取り組み（２）

放射能が壁となって福島市でのボランティア活動を躊躇してしまう人たちが多いが、カトリック山口教会の柴田潔神父は２０１３年12月26日(木)から30日(月)まで、５人の若者たちとボランティアに来られました。

岩手県大槌の被災の衝撃と比べたら「何の遜色のない町、福島市」で彼らに何を学び取ってもらえるのか心配でした。

今回は、大学1年生の和田里花さん、中学1年生の石川杏さん、高校2年の瀬良衛さんの体験記から抜粋を紹介したいと思います。

主な活動は、学童サークル星の子クラブ、宮代仮設住宅の餅つき、カトリック松木町教会との交流・「なごみの郷」訪問、福島市内視察（放射線量のチェック）でした。

◎一年間お小遣いを貯金して交通費に当てた中学1年生の石川杏さんの報告です。

「昨年の春には岩手県大槌町のボランティアに次いで、福島市の活動は2回目の被災地ボランティアになる。学童サークルでは積極的でうれしかった。他にも、ういろう作りや工



ったし、楽しんでくれたのがよかった。他にも、ういろう作りや工作、オルゴールを楽しんでくれた。宮代仮設ではＡＫＢ48の『恋するフォーチュンクッキー』にみんな手拍子を送ってくれた。このボランティアに関わってくださったすべての方々、そして神様に感謝したい。今回のボランティアで見たもの、感じたことを周りの人々に伝えることも、ボランティア活動の一つだと思うので、できる限り発信していきたいと思う。」

石川杏さんはその後、春休みにも中学生とともにボランティアのために再び大槌に行っていた。（カトリック防府教会）

◎大学1年生の和田里花さん。

「高校2年の時の岩手県でのボランティア活動で被災地を〝なま〟で見たときの衝撃はすさまじかった。一瞬で命を刈り取られたのが分かった。福島市はなんの遜色もない活気を見せた町だった。しかし、子どもたちは外で遊ばない。仮設住宅での男性たちは原発の仕事に関わっていると後で聞いた。自分の〝記憶の風化〟に気づいた。原発事故は過去の出来事ではなく〝現在進行形〟で襲いかかってくる脅威であることに気づいた。大人は自分が死ぬ前に、子や孫が安心して生活しているところを見たいと願っている。（私は）長期的に誰かの役に立つシステムに着目したが、今のことも未来のことも考えなければならない。起きていることを〝正しく認識する〟ことが私には欠けていた。」（カトリック祇園教会）



◎高校2年生の瀬良衛さん。

「ぼくは小学生の時、学校の近くの公園で、毎週木曜日くたくたになるまで野球をした。あのときの友だちとの思い出は今でも大切な宝物である。福島市には大きな公園があった。その公園は芝生も入れ替え遊具も除染し、放射線量は低かったが、誰もいなかった。昨年夏のボランティアをした大槌の子どもには、思いっきり遊びたいのに遊べる場所がなかった。福島は遊べるところがあるけど放射能の恐怖で遊べない。どちらも子どもの成長には大きな影響を及ぼすと思う。一日も早くこの恐怖がなくなり公園で思いっきり遊べる日が来るように祈っていきたい。」

春休みに行われた中国ブロックカトリック高校生大会で再会した瀬良衛さんは典礼のリーダーをしていた。（カトリック祇園教会）

このように若い方たちが３・11と原発事故に真摯に向き合って考えていることに感銘を受け、子どもさんをボランティアに派遣してくださった親御さんのご理解に感謝申し上げます。

私自身、４日間のボランティアに同行できたことで、若者の繊細な感性や実践力を目にして、若い人々に復興の逞しいパートナーの仲間意識を持ちました。福島市が復興するまでには多くの課題があり、遠い道のりです。もう福島は人間が住めるところではないと言う声も耳にしました。しかし、問題が起きているところには、親身になって解決しようと活動している多くの善意の人々がいて、彼らの「いのちの輝き」に希望を見ることができました。

今、私たちは自分の足で立ち上がり歩みだす力を、多くの方々の善意からいただいたと感じています。

（熱海紀子ｃ.ｎ.ｄ.）

清貧ということ

今では死語になった感じすらしますが、「清貧」は祈祷本にも見られるように教会の重要な徳目の一つです。その「清貧」を今日的な意味で再評価しようというのがこの小文の目的です。

有限の地球においてすべての成長（生産、消費、人口など）には限界があることを数学モデルで説明した「成長の限界」(1972 年)をローマ・クラブが報告してから 40 年余、先進国では省資源、省エネルギーが定着しております。しかし世界的には未だ普及しておりませんし、経済発展に伴う環境悪化も進行しております。これらの国に対し、日本や先進国の技術供与による問題解決が必要なことはもちろんですが、それと同時に、我々社会の未来が今のままの経済優先で果たして良いものかどうか再考する時であると思います。

物質消費型の現在社会から，清貧を旨とする消費抑制型、文化優先型の未来社会への転換を真剣に考える時期ではないでしょうか。無限の発展は原理的に不可能なのですから。

地球を大事にする会　白石　裕

教区研修会
典礼音楽・典礼聖歌
講師　新垣　壬敏氏

２０１３年度教区研修会（宮城県）は、２月11日(火)午後1時から4時30分まで、元寺小路教会を会場に行われ、70人程が参加した。

講師の新垣壬敏（つぐとし）氏＝写真＝は、「ごらんよ空の鳥」、「マラナタ」などの作曲者。典礼聖歌集にも多数の聖歌を作曲されている。長年、東京カトリック神学院で神学生の典礼指導にあたっておられる。白百合女子大学教授。

新垣氏は、ミサは、神に賛美と感謝をささげるものであり、典礼聖歌は、祈りの言葉が歌になったもの。従って「ことば」が大切にされなければならない。

ミサの中で聖書朗読があるが、朗読者は、内容が良く伝わるように読まなければならない。そのためには、間の取り方が大切である。



間には、納得の間、緊張の間がある。説明文は早めに、大切な言葉をはっきり読むようにすること、また、聴き手の年齢層に合わせて、若者が多い時は少し早目でも良いが、高齢者にはゆっくり読むほうが良い。

「カトリック聖歌集」の中には、言葉の意味が通じ難いものやラテン語を直訳したようなものがあり、懐かしさやメロディーにつられてミサの中で歌うのは、典礼聖歌の趣旨からするとふさわしいとは言えない。

典礼で歌う聖歌を選ぶときは、テーマに合わせて歌詞の内容を検討する必要がある。

歌は言葉と音が一体となって構成される。言葉の区切りと音の区切りがバラバラではおかしい。音楽は、人の心に影響をあたえるものだから、どのような集まりか、どんな人がいるかなどその場に合わせることが大切であることなど熱心に話された。

カンボジア・ステンミエンチャイ地区での活動報告③
元寺小路教会　小野　武

今回は、「カンボジアの教育環境」と「ＪＬＭ(日本カトリック信徒宣教会)の教育支援活動」について紹介させていただきます。

カンボジアの教育環境

日本と同じく6・3・3制となっていて、最初の9年間、小学校と中学校が義務教育となっています。学期は、10月から9月までです。小学校の就学率は69％(平成24年3月)です。歴史的背景を見ておかなければなりません。つい30数年前のポル・ポト政権時代に教育は、資本主義を教え込む元凶と捉えられ、校舎が破壊され、教育者が抹殺され教育基盤が全く失われてしまったのです。





ようやく学校が建てられてきていますが、教員の待遇は、月給約80ドル（日本円で8千円）、縫製工場の工員の最低賃金と同じレベルでとても安いのです。そのため教員のなり手が少ないのと、教員になっても副収入を稼がないと生活が出来ないのが現状です。

小学校の授業は、午前・午後の二部制になっていて、午前の授業を持っている先生は、午後、自分の学校の生徒を対象とした塾を開きお金を取って副収入を稼いでいます。塾では、授業の続きや補習を行い、進級試験にここから問題を出すのでここに通わないと進級が難しくなる仕掛けになっています。

ＪＬＭの教育支援活動

このようにとても厳しい教育環境になっていることから、ＪＬＭが、カンボジアの将来を担う子どもたちを育てるための一助として教育支援活動を行っています。

私が教育支援に関わった子どもたちは、プノンペン市郊外のステンミエンチャイ地区ルセイ村第17地区に住み、ゴミ拾いで生計を立てている貧しい家庭約200世帯の3歳～12歳位の未就学児童約100人です。6歳で小学校に就学できるのですが、その年齢を過ぎても学校へ行っていない子がたくさんこの地区にはいます。親は、教育にはあまり関心がなく、家事の手伝いをする子が良い子なのです。ここの子どもたちが小学校へ行った時、落第や退学をしないように識字・道徳・衛生・規律・音楽・体操等を教えています。

子どもたちの年齢幅があり能力の差があることから、三つのクラスに分けて授業を行なっています。

授業は、月曜日から金曜日までの8時30分から11時までです。各クラスとも先生1人、アシスタント一人が担当しています。私どものカリキュラムと実施状況は3カ月毎に、カンボジアの教育省に届けています。

訂正とお詫び

教区報126号2ページ司祭異動で第2地区に横島健二師の名前が抜けていました。お詫びして訂正いたします。

訃報



スール　マリアンヌ　フランソワーズ　櫻井　高子

1921年　生れ

1943年　聖ドミニコ女子修道会入会

1945年　初誓願

1948年　終生誓願

2014年3月18日　帰天　93歳　立誓願後69年

入会後、仙台天使園の園児たちのための養育に献身。

京都修道院設立後、京都市内において宣教に従事。

その後、聖ドミニコ学院小学校教師として教育に携わった。

定年後は、青野木修道院にて多くの方々の受け入れ、近隣の方々との交わりの中で宣教に尽力した。

ロゴス講演会
「寅さんとイエス」

講師　米田 彰男 師
（ドミニコ会、清泉女子大学教授）
3月16日（日）北仙台教会



型破りの寅さんのように、講演会は寅さんの主題歌である「男はつらいよ」の講師の独唱で始まった。次いで「寅さんとイエス」の本を執筆した動機について説明があった。寅さんの映画には27年間にわたりおよそ8千万人が映画館に足を運んだ。それだけ寅さんの魅力があるからだ。もしイエスが寅さんのように愉快で魅力ある人物であるなら、イエスもまた日本人に受け入れられるのではないか。イエスが実際に寅さんに似ていることを、大変に魅力に富んだ人物であることを、最新の聖書学にもとづき説明したい。

イエス自身は書いたものを残さなかったので、後の人たちが記述した福音書などを通してしか、イエスの教えや人柄を知ることができない。イエスの十字架上の死後30年ほどはイエスを直接知っていた人たちを中心にした口伝えのみであり、文字としての記述はマルコ福音書が最初である。その後10年ほどでルカ福音書などが書かれている。ルカ福音書はマルコ福音書を参考にしながら編集されているが、両者を比較すると、ルカ福音書はイエスの姿を大変穏やかに記述している。そのような穏やかな記述のルカ福音書の中で、イエスは「大食漢で大酒のみだ。徴税人や罪びとの仲間だ」とあることから、実際のイエスはさらに破天荒な人物であったと推定できる。同時に相手を思いやるやさしい気持ちが強く、困っている人、悲しんでいる人の隣人になり共に歩もうとする温かく親しみやすい人物でもある。

このような人物像はまさに「寅さん」に重なり、多くの人たちの共感を呼ぶのではないか。「歴史の中のイエス」がこのように親しみやすい人物であることを、教会の人たちにもぜひ知ってもらいたいと強調された。

オタワ愛徳修道女会 一関に修道院開設

オタワ愛徳修道女会は3月29日に一関教会主任司祭、佐藤守也神父の司式によるミサで一関修道院の開設を祝いました。

昨年の10月に殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会の副管区長を通して、一関の修道院を提供したいとの話がありました。10月16日、この日は私たちの会の創立者聖マルグリット・デュービルのお祝いの日で、被災地でのボランティアを続けるために背中を押されたと感じました。派遣された修道女2名は、この地を拠点に被災地に出向き、被災された人々のそばに寄り添い続け、「あなたは大切な存在です」とメッセージを送り続けること、この修道院が各ベースで活躍されているスタッフの休養の場として、訪れる人々がマリア様の慈しみに包まれ、元気を取り戻し現実の社会に戻っていく場となっていくことを希望しています。

（管区長　佐藤久美子）



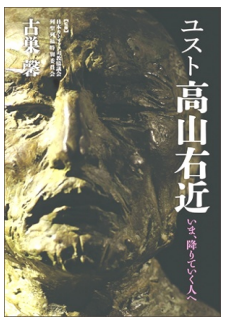
告知板

★「後藤寿庵祭」
日時：2014年5月２５日(日) 午前10時
会場：奥州市水沢区西田「寿庵廟」前
（雨天　水沢教会）
内容：ミサ聖祭(ミサ中、田畑の祝別式・来賓祝辞 他)
主催：カトリック水沢教会
（電話/FAX　0197-25-7707）
(参加する教会は、人数と昼食注文数を 5 月 18 日まで連絡)

★「後藤寿庵顕彰会」発足　会員募集中
後藤寿庵の福原着任400年祭を契機に寿庵の功績や偉業を讃え広く顕彰し、その精神を継承する。年会費 2,000 円
入会希望者は、水沢教会担当司祭 高橋昌神父までご連絡ください。
（司祭携帯　090-4551-8454）

新刊案内

ユスト高山右近―いま降りていく人へ
著者　古巣馨／発行　ドン・ボスコ社／定価700円＋税



本書は、現在、列福調査中のユスト高山右近の伝記ですが、単なる聖人伝とは趣を異にしています。聖パウロが、キリストを「神の身分でありながら、…かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。…へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリピ2・6-8）と示した、このキリストに倣い、生きた高山右近を描いています。サブタイトルの「いま、降りていく人へ」もそのことを表しています。

信長、秀吉の乱世の時代に生を受け、1564年6月に、ロレンソ修道士によって、10歳の右近（当時は彦五郎）は、ユストという洗礼名をいただき、洗礼を受けました。

1573年、高槻城主・和田惟長が、彼の家臣であった高山父子の人望の厚さに危機を感じ、右近暗殺を企て、ついには一騎打ちとなり、右近から傷を受けた惟長は、死んでしまいました。この事件によって、右近も瀕死の傷を負うのですが、それ以上に、心に深い傷を負い、苦しんでいる時に、神のもとから降られ、人となられたキリストに触れたことが、右近の生き方を、全てに超えて神に生きるキリストの姿に倣うものとなりました。

高槻城主の身分から、国替え、そしてキリシタンという信仰ゆえの追放、囚われの身、国外追放と、右近の生涯は、多くの宣教師たちが残した書簡の中に驚嘆をもって書かれています。右近が移り住む所には、教会が生まれ育ち、宣教師たちを支える右近の姿がありました。「教会の柱石」「伴大連の大日那」と尊敬された右近は、1614年11月8日、フィリピンのマニラに追放となり、12月11日マニラ港に着きました。当時、フィリピンを治めていたスペイン人のマニラ総督はじめ、フィリピンの人々に右近の信仰はよく知られており、祝砲をもって歓迎しました。

病を抱え、過酷な船旅で衰弱した右近は、家族、内藤如庵、モレホン神父に看取られながら、1615年2月3日、生涯を閉じました。63歳でした。